りせと

いや、あのりせちーと……

特別すぎる関係になってしまった

雑誌のグラビアや、テレビ番組で眺めるだけだった
あのトップアイドルが
今では毎日、放課後になると俺の元へとやってきて
発情しきった目で俺を上目使いに見つめてくる。
そして毎日、世の多くの男性が夢に抱いたであろう
その美しい肉体のすべてを俺の前で惜しげもなく晒し
誰にも見せたことのない淫らな仕草で
俺との交尾を何度も何度もねだってくるのだ。

セ〜ンパイ☆
今日もまた、まるで飼い主の帰りを待ちわびた雌猫のような甘く鼻にかかった鳴き声でりせが教室から出る俺を呼び止める。
ねぇセンパイ今日も放課後は……私と……でしょ？
まるで選択肢は一つと言わんばかりに声を湿らせ、体をくねらせ、瞳を潤ませ必殺の上目使いで迫ってくるりせ。

当然迷うことなくイエスと応えると
期待に満ちたまなざしのりせを
まっすぐに校舎の中でも人気のないスポットへと連れ込む
今日は…なにする？
そうは言いながらも、どれだけふしだらな想像を
巡らせてしまっているのか。
まだ腰に手を回して見つめあっているだけなのに
すでにりせの頬は赤く火照り、艶っぽい唇の隙間から
ピンクな吐息が漏れはじめ
人一倍、いや三倍は整った顔が見る見る蕩けていく。

その無防備でツヤツヤのリップに一瞬で欲情を抑えきれなくなった俺は
りせの細い両肩を掴んで、腰を沈ませるように力で伝える。

……あはっ
そっかぁ♪……えへへ

すぐにこちらの意図を察したのか
それともまさかのお望みどおりだったのか
りせは幾分の照れ笑いを浮かべると、まったくためらうことなく
膝腰を曲げ、床に手をつき、俺の腰の高さまでしゃがむと同時に
そこからこちらを見上げては……

こんなのとてもじゃないが他人には見せられない……
いや決して他の男なんかには拝ませたくはない……

りせはいつでもいいよと言わんばかりに、待ちきれない紅い舌を遊ばせ
とてもいやらしくはにかんだ。

俺がたまらず股間からチンポを露出させると
りせは一層下品な笑みを浮かべてから
いきなりむしゃぶりついた。
はむっ……ぶじゅっ……んぶっ、んぶぅ
んふっ……じゅぼっじゅぼっじゅぼっ
さっきまでしおらしげに体をくねらせて
甘えてきた女の子とは思えないほど
激しく、一心不乱に、
グロスでてかった桜色のリップが唾液まみれに
なることもいとわず
ただひたすらに好物の肉棒をほおばっている

初めの頃は舐めるだけでもおそるおそるだったのに
ほんの数回仕込んだだけで、どうやらハマってしまったらしく
今では愛しげに竿部分に頬ずりしたり
亀頭の匂いを嗅いでは延々舌先で弄んでいるほど
大のお気に入りとなったらしい。
んふー……んっんっんっ……んんぅ
んっ、んぐっ……んんん……っ～～
じゅぷっじゅぽっじゅぽぽっ……
すでに男根に無我夢中の元トップアイドルは
たまに思いっきり喉奥まで飲み込んでは、吐き出し
すぐさままたしゃぶりつき、なおも激しく前後に上体を揺らして
あんなにかわいらしかった口元をヨダレまみれにしながら
柔かい唇で精一杯、ガッチガチに固くなった肉竿をしごきあげる。

ほどなくして……
激しい反復運動の疲れを見せ始めるりせだが
それでも咥えたモノを全く離そうとはせず
両ヒザをぎゅっと閉じて、切なそうに下半身を
もじもじとくねらせる。

やがてぺたんと床にへたりこむと
なにかを懇願するようにこちらを見つめてくる。

……あむ……う……
ひぇんはい……ん……ちゅ……
んもっほぉ……ほひぃいほぉ……
えろっ、ちゅぶっ……ひへぇ……

ん♡
ブーッ
グチュ
ロ
チュパ
ロ
チュプ
ブーッ
ん♡ふ♡ふ♡

軽く首をかしげつつの斜め上目使い
しかも口には男のモノを咥えたまま
白く泡立った液体を口から垂らしたままという
なんとも目眩がしそうな光景だが……
要はどうやらこちらにも動け働けという催促らしい。

そして、どうしても欲しくてたまらないのだろう。
もう一つのお目当てである、白く汚らわしいミルクが。

俺はりせの頭と腕を抱え、腰を浮かせた姿勢に戻させると
自分の両足をりせの太ももの間に割り入れて
そのまま押し進み、りせを体ごと背面の壁まで後退させた。
股を押し広げられながらがに股で壁へとあとずさったりせに
両手を掲げさせ、俺はその手首を掴むと
りせを壁へと押し付けるようにさらに歩みを進める。
男性器を喉奥まで捻じ込まれ
股間はあられもないほど押し広げられたまま
頭部、両手、両足を拘束され
まるで壁に押し付けられたカエルのような情けない姿勢の
りせをじっくりと堪能しつつ弄ぶ。

数々のファンを魅了する美声を発した喉も唇も
深々と挿入された肉の棒で押し広げられ
美しく整った顔も、ちぢれた陰毛にまみれてしまっている。

んんん！
おごっ……ごぼっ
んおぉ……

自身への蹂躙とも呼べる恥辱的な口虐に、驚愕で見開かれた
その目は焦点を失い、ついには涙を滲ませ始めたりせ。

だがそれも束の間、やがては恍惚の表情へと変わり
嬉しそうにこちらの手首を弱々しく握り返すと
ねだるように指先でくすぐって意志を伝えてくる。

これほどはしたない格好に貶められても
一心に求めてくるりせにさらなる加虐心をそそられた俺は
徐々に腰のスライドを増幅させ
えづくたびに粘ついた液体を溢れさせるりせの口腔に
何度も何度も奥深く亀頭を突き立てた。

しばらく壊れた蛇口のような嗚咽と液体音だけが続き
やがて呼吸もままならず朦朧としてきたりせに
俺は股間からこみ上げてきた精液を躊躇することなく
喉奥めがけてぶちまけた。

心ゆくまで射精を注ぎこんだ俺は
もはや完全に顔面オナホでしかないりせの頭部を
チャームポイントであるツインテールを鷲掴みにして固定し
突き刺したチンポをそのままに、りせの顔面に股間を
ぐりぐりと押し当てる。
単なる優越感や征服感が振り切った結果の、なんの意味もない
マーキング行為だが、その間もりせは喉奥をごぼごぼと
鳴らしながらも、必死でむせ返るのをこらえている。
やがて満足しきった俺は、ようやくりせの口内から
ずるりと肉の栓を抜いて解放してやる。
それと同時に精液と唾液が混濁した液体が太い糸を引いて
引きずり出され、勢いよくりせの顔面を汚らわしく彩った。

……っ……えげっ……っご……えぼぁ！
ぶっかは……げほっげほっげほっ……
あひゅー……ひゅうー……んはっ……
あぁ……んあぁあああああっっっはぁ、はぁ……

半ば白目をむきかけていたりせは、突然の解放に
むせ返り、えづき、酸素を吸い込み、そしてまたむせ返ると
細く弱々しい呼吸と共に。被虐の余韻に身を震わせはじめた。

口内も顔面も意識もどろどろに犯されての放心状態で
りせはその口から漏れる生臭い息も、糸を引いて垂れ続ける
白濁も意に介さぬまま、夢中で苦楽の狭間に浸っている。

小さく固めた身をぷるぷるとかわいらしくわななかせ
唇も舌も放り出したままの蕩けきった表情で
獣声をか細く漏らしながら宙を見つめるりせ。

この人並はずれた美貌と、まだ若干のあどけなさを
合わせ持った女の子にも例外なく備わっている艶かしい
女性器官が、もはや疼きに疼いてたまらないと
恥ずかしながらもその全身で伝えてしまっている。

そして彼女が見つめる先には、同じく粘ついた白液に
まみれながらも、俄然雄々しくそそり立った男性器があった。

……あ……しゅご……い……
あんなに、あんなに激しかったのにい……
あんなに……はぁ……たくさん、出たのに……
まだ、こんなに……元気なんだ……

りせはよろよろと体を起こしてこちらに近づくと
今度はヒザ立ちの姿勢で、俺の反り立ったチンポに
上から覆い被さるように唇や舌をあてがい
今度はアイスでも舐め取るかのように軽やかに
自ら白濁液を口に含んでいく。

その過程で自分の顔や胸元を汚している存在にも
ようやく気づき、さらに思い返せば無理矢理口腔奥へと
流し込まれたものを除けば、お目当てだったミルクは
ほとんど吐き出してろくに味わってないことにも気づくと
自分に付着した残り物を舌や指で丁寧に拭き取っては
口の中でくちゅくちゅと味わっている。

ごめんねセンパイ……
私ほとんど吐き出しちゃって……
すっごく、激しかったから……

そう言いながらりせはまだ固いままのチンポを愛しげに
指でなぞっては、大きな目ですがるように俺を見つめる。

物欲しそうなりせを満足させると同時に
少々のお仕置と、さらなる恥虐を教え込むために
俺はりせを連れて人気の無い教室へと潜りこんだ。

まだ体に力のないまま俺にしがみついてるりせを抱え
俺は人気の無い教室を選んで連れ込んだ。

教室の中に入って鍵を閉めると
おもむろにりせの制服を脱がしにかかる。
制服のままがいい、というりせの弱々しい抵抗を
楽しみながらわざとらしく強引に手をかけていくと
りせは半分拗ねたように自分の手で脱ぎ始めた。

眼前で下着姿になっていくりせちーのストリップを
堪能し終えると、俺はりせを教室内の椅子、机、教壇
様々な物で煽情的なポーズを取らせては、言葉や指で
りせの弱い部分をいたぶるように責めていく。

肉体のいたる箇所へと身勝手に指を這わせ
口づけをせがまれても焦らしつつ
湿った下着を机や椅子に擦り付けさせ、過激な言葉で
なじったあとで、抱き潰すようにして首筋や背中を
ねっとりと撫で回しながら長く深く唇を塞いでやる。

一度スイッチが入ってしまったりせは、上からアメとムチで
転がされるのに人一倍弱い。
りせちーという固い殻をかぶっているだけで、中身はまだ未熟の
依存させてくれる相手に飢えに飢えまくっている女の子なのだ。

……ビクッ……あっ……
ふぁ……あむ……ん……
ドキ

呼吸と思考を奪われていくたびに、りせの欲求はシンプルになり
弄ばれ侵されることに敏感になっていくのがわかる。

濡れそぼった下着の中にいきなり手を突っ込まれ
女性の最もデリケートな秘部を乱雑にまさぐられ
唇を押し退けて口内へと侵入した指で舌を絡めとられては
自らの恥ずかしいほど滴っていた愛液を舐め取らされ
その唾液にまみれた指はまたも躊躇なく股間へと滑り込み
我が物といわんばかりに膣内へと挿入され
りせはその敏感になった粘膜を掻き乱されながらも、その腕に
媚びを売るようにしがみつき、悦びで体をよじらせてしまっている。

かつて誰のものでもなく、ステージの上で世の男たちの
羨望の視線を一身に浴びていたアイドルりせちーの肢体は
今この夕日の射す人気の無い教室で、たった一人の男の
手によって、まるで安物の人形のようにいじられ汚されていく。

そうしてりせは何度も何度もピンと張った四肢を打ち震わせて
教室に唾液と愛液を撒き散らしながら、俺にしか聞かせたことのない
くぐもったヨガリ声を上げた。

軽い絶頂を迎え、弛緩した体を俺に預けているりせ。
ビクッ
ビクッ
気がつけば下着も剥ぎ取られ、自分ひとりこの校内で恥態を晒しては
幾度もよがり悶えてしまっている事態に気づいたりせは
火照った顔を一層真っ赤に染め、観念したようにしがみついてきて
……もうどうなってもいいから……
……と、耳元で囁き
自ら男の股間のファスナーへと細い指先を這わせてきたのだった。

……あん……こんな、こんな場所で、私……
俺はりせを教壇まで連れて行き、黒板に手をつかせて
脚を開いて尻を突き出させた。普段は多くの生徒が座る側へ
むき出しになるりせのプレミアお宝もののマンコとアナル。
すでに二度もの辱めを受け、自身の汗と愛液でてらてらと
濡れ痺れてしまっているその女陰部分は物欲しそうに
ヒクヒクと蠢いているのが一目でわかる。
セン……パイ……
は、はやく……こんなカッコで、私……
私おかしくなりそうっ……！
張り詰めてきたりせの腰を後ろから抱えて背中を撫でて
なだめてやる。もはや体中の感度が上昇しているりせは
たったそれだけで背筋を反らしては切なげな吐息を漏らす。
深いぃ♥
はっ♥ はげしっ♥

りせのお尻がちょうどいい高さにくるように腰を引き寄せのしかかるように内股に手を入れてさらに脚を大きく開かせる。押し当てられる股間にりせは身をよじらせヒップを擦りつけて必死にせがんでくる。

はぁん……もう、おねがいだから……なんにもわかんなくして……センパぁイ……

自ら男に尻を振りながらの精一杯のおねだりを聞き入れた俺は、固く張ったペニスの先を押し当てるともはやそれだけでブルブルと震えるりせの尻たぶをわし掴み、と同時に一息で長く太い肉弾をりせの奥深くまで突き入れた。

……いっぎっ……
……はっん……〜〜っっ……
っひぃんんん〜〜……

すでに言語を失っている上の口とは裏腹にぐしょ濡れの超プレミアりせちーおマンコは男性器を歓喜で迎え入れ、ソレを一飲みで咥え込むや否やきゅんきゅんとかわいらしく絞めつけてきた。

んあ、あぁ……こんなぁ
一気に、奥までぇ……
お腹の奥深くに太く長い肉の塊を突き入れられ
子宮口まで一気に、腰ごと突き上げられたりせは
息も絶え絶えに黒板にすがりついて
いきなり崩れ落ちそうになった体を支えている。
とはいえ、腰から下は杭のような肉棒と
乙女の股の間にこれ以上ないほど分け入った
太ましい下半身によって、がに股状態で突き上げ
られ腰を浮かされてしまっているという
すでに目もあてられない体勢である。
俺はりせの最高の恥態を拝むべく、まずは
そのまま激しく腰を何度も叩き付け、華奢な
下半身を暴力的に突き上げ続ける。
深
あ
あぁ
はっ
はげっ

爪先立ちになるほど腰を突き上げられ、全身を震わせて男根を貪るりせの姿をありがたく拝みつつも、俺は休むことなく激しく責めたて続ける。

被虐的な官能に身悶えるりせの膣内を散々掻き回し
お次は胸を揉みしだきながら上体を起こしてやり
黒板と挟んで押し付けるように体を密着させて
腰を捻って深い部分を抉り続ける。

あっふ……
うんんん……これ、スキ……
はんっ、んんっ……

さっきとは打って変わって、いつもの鼻にかかった
甘く心地よいよがり声が搾り出され、りせは切なそうに
黒板に半身を擦り付ける。

その体を後ろから羽交い絞めのように抱き
黒板とは反対に向きを変え、生徒の机が並ぶ方へ
向かせてそのままゴリゴリと膣奥を刺激する。

思わず顔を伏せるりせにかまわず奥を責め続け
りせの体が固く突っ張り始めたのを確認した俺は
ここぞとばかりにりせを支えていた両手を離した。

……あんっ

どうしようもなく、上体を下げてぺたんと床に手をつくりせ。

やっ……やだ……

四つ足立ちの獣が尻を突き上げているような体勢になり予想外の恥ずかしさで途端に正気になっていくのがわかる。俺は間髪いれずにりせの恥ずかしいほど突き上げられた尻を平手で打ち、そのまま教室内を移動するよう命令する。

キチク、すぎるよぉ、センパイ……普段は、優しくて、クールなのにっ……急に、ドSなんだ、からっ……

愚痴をこぼすりせの尻をペチペチと叩きながら、腰を押し付けて前へ前へと押しやる。ぺたぺたと手をついて進むりせの後姿を見ていると加虐心、獣欲、支配欲が一斉に湧き上がり、その度に足を止めて好きなだけりせの中をかき乱す。

んはぁっ……こんな、こんなカッコで……あぁんっ……私っ、私いっ……さっきよりっ……いひいんっ！

深…

ビクッ

あ♡

あぁ♡

はっ♡はげっ♡

そこらの獣よりも獣のような交尾で何度も何度も身を強張らせ、震わせ、崩れ落ちるりせを、その度に尻を叩いて無理矢理立たせてはまた歩ませ、そして犯す。

やがて教室の後方へとたどりつく頃になると、りせはもはやろくに立てないほどに足腰を快感でガクガクと震わせ、遂に最大の絶頂の波を迎えようとしていた。

膝立ちの四つんばいの体勢まで崩れたりせに覆い被さり丹念に膣内を擦り上げ、子宮口を押し戻すほど打ち込み膣口や陰部全体を刺激するようにグリグリと押し付けては引き抜きながら腰から回した手でクリトリス付近を圧迫して刺激してやる。

唸るようなヨガり声を上げてりせの上半身は崩れ落ちもはや地面に突っ伏して完全に性交の快楽を享受することしか考えられなくなったりせの穴に、俺はひたすら肉棒を送り込んだ。

ふっぐ……ひぎっ、っっっ～～～～！
ひぐっ……いっっぐぅ！いくぅっ！
んあぁ！っあ！っ～～～～～っっっ！！！

りせは唸りながら両腕を背筋を限界まで突っ張らせ全身をビクンっビクンっと大きく痙攣させると
しばらく小刻みに震えたまま静止し、やがて弛緩すると
突っ伏したまま肩で大きく息をし始めた。

脱力したままその場に突っ伏して動かないりせを抱き起こす。
その表情は完全に弛緩しきっており、垂れ流された汗、涙、
唾液でせっかくの綺麗な顔が若干残念なことになっているが
それでもその色っぽい吐息を漏らしつづけるアクメ顔は
世の男性の情欲をかき立てるには十分すぎる艶っぽさだ。

俺は抱き起こしたりせをその場の床に向かい合うように
座らせると、すらりとした脚を大きく開かせて股の間に
分け入り正常位で組み敷く。

……え……ふぇ？……
しぇん……ぱい……う……そ、でしょ……

りせは驚いているが、俺からしてみればむしろここからが
本番というのが本音なのだ。そもそも俺はまだイッてない。

ひやぁ……ひやらぁ……
しゅ、しゅごかったんやからぁっ……
今だって、まだ、イッて……らめぇっ
もぉ、もぉむりぃっ……むりむり

ろれつも思考も回ってないりせにかまわず覆い被さると
俺はどろどろになっている膣口からまたも一気に押し入る。

はひぃぃっ！

天を仰ぐように体をのけぞらせるりせ。

俺はかまわず絶頂の余韻で全身が痺れまくっているりせを押さえつけてここぞとばかりに襲いかかる。

んやあっ……やめっ……
にゃっ、あひっ……やらっ、やらぁっ……
んあっあっあっあっんあぁぁぁ！

もがく力もないりせの敏感な部分、そうでない部分を愛撫しながら、奥の子宮口も亀頭の先で丹念に刺激し、そのあとは膣口など浅いところをぬぽぬぽと刺激しながら、大陰唇、小陰唇などもぐりぐりと弄ってやる。

にゃあぁっ……しぇんぱいぃっ
もおおっ……ひんじゃ、ひん、じゃうぅっ
あひいいっっっ……

そもそもりせはまだ感度が、開発がイマイチなのだ。締まりや淫乱具合は申し分ないのだが、いったい一度のアクメにどれだけの前戯・挿入の時間をかけさせるのやら。

それに仕込みたいことはたくさんあるのに、一度果てたくらいでいやいやするような女では困る。

そもそもだ……。

俺はりせの股ぐらに腰を叩きつけるたびにぐりぐりと押し付け太腿を抱えてはしっかり密着させる。股の間に男を迎え入れる感覚をきちんと教え込んでおく。そしてクリトリスを皮ごしに揉み解しながら、Gスポットを擦り上げてやると……

んにゃあああ！りゃめぇぇ！これ！このっ、せいじょういい……すぐっイッちゃ……んぉ！おぉぉぉ！おっ！おぉぉぉぉん！

まさしく獣のようなヨガり声を上げてりせはあっさりと次のガチアクメを迎えた。

要は一番敏感な部分を責めればこれほどの反応はできるのだ。もっと指や舌や言葉だけでイキまくって、俺から離れられないほどに心も体も調教していきたいのだ。

なんせこれだけの美少女でセックスがいいってのは貴重だ。相性は申し分ないし、なにより積極的で淫乱。

ほんとの意味でおチンチン大好きと言ってくれる女はリアルでなかなかいるもんじゃない。
唾えるどころか手で触るのも嫌だという女性は少なくない。

その点りせは形も肉感も臭いも頬張った感触も好きで仕方がないというのが見ていてわかる。

目の前に肉棒を放り出すだけで、嫌な顔一つせず……というよりいやらしい笑みを浮かべながらまるでお気に入りのオモチャのように弄り始め美しい顔を自分から男の股の間に突っ込んでは指や頬で肉の感触を楽しみながら、キンタマの裏から裏筋の隙間までねっとりじっくりとふやけるほどに舐め上げ、あげく口に含んでいるだけで勝手に興奮して濡れ始めるのだ。
こちらの表情だけでなく、チンポ自体の反応を楽しんでくれるあたりも並みの好きものではない。

もちろん愛情をもってりせとは交際しているがアイドルに未練を見せるりせを温かく見守ってあげく手を離して送り出すなんて冗談ではない。

おぁ……あぁ……
しぇんぱい、の……ばかぁ……いじわりゅう……
ヘンタイ……オ、オニィ……アクマぁ……
……キチクめがんぐっ……んんっ

悪態をつくまで復活したりせの唇を唇で深々と塞ぎ
完全にのしかかるように覆い被さる。
下の口も熱く硬い肉の感触で奥まで埋めてやり
もはや正常位でイキまくりのりせに次々と愛撫を
施し、硬い男の体に抱かれる悦び、肉と肉が隙間
なく埋まり合う感触、全身に眠っている背筋を
駆け上がって脳髄を痺れさせる性感を刻み込む。

そしてとうとう俺は射精目的の最後のピストンを
開始する。今度はりせがどれだけ意識を飛ばそうと
途中でやめるつもりはない。
オナニーで済むような己の放出目的の射精ではなく
りせの最も優秀で多能な女性回路を通し、俺という
男からもたらされる様々な性的情報を全身に焼き
付けるための最後の仕上げだ。

多少配線が焼き切れて狂おうとも受け止めてもらう。

びたんびたんと打ち付けられる陰部同士がお互いの体液でぬめる。女性器全体をほぐされ刺激され上下の口を完全にふさがれたりせは、もはや半分白目をむいて意識が飛びそうだ。
それでも腕だけは必死に抱きついたままなのは褒めてやりたいぐらいかわいい。
そう思うと、腰のあたりが熱くなり、気分も一気に高まってきた。

フィニッシュへ向けてさらに勢いよく腰をスライドさせる。傍から見たら可憐な少女に獰猛な獣が襲いかかってるようにしか見えないだろう。
限界まで体を反らしてイキ続けながら、なおも追い打ちをかけられて喘ぎ悶えるりせの姿に満足して昂ぶりが最高潮に達した俺は、とうとう頭が白く染まるような限界点に達した。

そうだ、足も絡めるように教えないとな、などと考えながら、俺はせり上がってきたありったけの精液を、りせの膣内から子宮まで隅々に行き渡るように一滴残らず流し込んだのだった。

もはや足腰も立たず、力も抜けて、イキまくって震えが止まらなくなったカラダを抑えることもできないりせを抱き起こして壁に寄りかからせる。
トビにトビまくったせいでまだ目はうつろ、口も半開きで言葉にならない喘ぎ声を漏らすばかりだ。
まだ腹の中にはアツアツの精子がヒダの隅々にまで染み渡っていることだろう。へたり込んだ床には股間から漏れ出た精液が生々しく吐き出され、りせの内股にもそこから伝ったおびただしい量の精液が見て取れる。

一度目から二度目の射精まで散々楽しませてもらったせいか、とんでもない量の精液が急遽精造されてしまったようだ。
まぁりせちーが相手となれば仕方がないというもの。

ただ少々やりすぎたかもしれないので少し介抱してやろうか、
俺が近づくと

……ふぁ……しぇ、んぱい……
もぉ……おね……い……
げん……か……い、らかや……ゆゆ、ひて……

あ

若干怯えも混じったような表情でりせが泣きながら懇願してくる。気がつくとたしかに俺の股間は勃起したままで気分はすでにスッキリしているのだが、見た目にはそうとはわかりづらいだろう。
それにたしかに今の弱りきったりせを見て、ここにダメ押しでトドメを刺して泣き喚きながら失神アクメするところを見るのもおもしろいんだがと心によぎって少々硬度が増してしまったのも事実ではある。

トロォ…
ドビュッ～～

りせはもういやいやと完全に泣きべそをかいてしまっている。
俺はどうするか決め兼ねてりせの頭を優しく撫でてやりながら
勃起しっぱなしの股間を顔の前に近づけてみる。
すると、精液と愛液でどろどろになったペニスを前にしたりせは
一度だけ俺の表情を伺うと、泣き止んで上体を前に起こし
下から煽るようにぺろぺろと舐めて舌掃除をしはじめた。

自分の愛液交じりの液体をちゅるちゅると難なく口に運ぶりせ。
嫌悪感など微塵も見られず、むしろ奉仕が進むに連れて
肉棒への感謝の情すら滲み出ているような、口付けやいたわりの
愛撫が混じった愛情溢れる行為へと変わっていく。

おもちゃを与えられた子供が泣き止むかのように
りせはもう目の前のチンポの感触で落ち着きを
取り戻していた。
それを舐めれば舐めるほど、男の理性は揺らいで
いくのだが……だが俺はもうそんな獣じみた感情は
どこかに飛んでいってしまい、男性器にしゃぶり
ついてくるりせを愛しいとすら思ってしまっている。

するとりせが亀頭に口づけた状態で、中の精子を
チュルチュルと吸い出しつつ、上目使いでこちらを
申し訳なさそうに見上げる。
なにかと思ったが、おそらくりせも硬いままの
チンポや、自分の中に再燃してきた情欲を前に
これ以上進むべきか止めるべきか、俺はどうなのか
好奇と不安で判断に迷ったのだろう。

……そういえば明日は祝日だった。
俺はりせにうちに来てシャワーで汚れを落とした
ほうがいいと、口づけされたままのチンポが
ひどく硬く熱くなるのを感じながら誘ってみる。

りせはそんな俺の様子を見て、一瞬でどれほどの淫らな想像をしたのか、途端に顔を真っ赤に蕩けさせながら、亀頭に口づけしたままこくりと頷いた。

このまま男の部屋へと連れ込まれたら、今夜一晩中、いや下手をすればその次の日も一日中ずっと、布団の中に二人きり欲望のままにのしかかられて、抱かれ続け、イカされ続けありったけの子種を注がれて、完全に男のモノになってしまうかもしれない。

そういった了承を、今この少女は自らしたのである。

俺は顔を上気させたままのりせの唇を割って亀頭を呑ませた。
目を伏せ、体をプルプルッと震わせて悦びを見せるりせ。
どうやら口内を侵されるのも、りせにとっては性的興奮を
感じる要因の一つなのだろう。倒錯に震えていた感情が次第に
官能的悦びへと変貌しつつあるようだ。
少しの間りせをあやすようにして肉棒を味わわせてから
恥ずかしがるりせの股間や内股、口元の液体も綺麗に丹念に
拭き取ってやる。
最後にもはや腰が抜けてしまっているりせを男らしくおんぶ
して持ち返ろうとしたのだが、なぜかこれに関してはそんな
ことをしたらパンツがまる見えになるからと、先ほどまで
教室で全裸だった少女に激昂されて謝罪する羽目になった。

りせをうちに連れて帰りお互いの体液でドロドロになった体をさっぱり洗い流すべく、シャワーでお互いの体を洗い体を重ねて湯船に浸かる。

お互いこれからどうなるかは暗黙で了解しているからか上気した身体が湯船で火照って、肌を触れあわせているだけで興奮が高まって身体を擦り合ってしまう。

若干のぼせそうになった俺が湯船の縁に腰掛けると、それを見たりせは嬉しそうに俺の太腿を枕にするように寄り添ってきた。そこにはもう十分に精液を再精蔵し終えて張ってきた男性器がふてぶてしく首をもたげていて、ソレに対してりせは枕元のぬいぐるみにでも頬ずりするかのように肉竿に顔を擦り当てて戯れる。

要するにりせにとって俺のチンポは性行為以前のぬいぐるみかペットかなにかのような愛着を持たれているのかもしれない。そこまで全面的に自分の性器を愛してもらえるというのはなかなかに光栄なことではあるが、りせがそれをやるとこちらからの眺めは当然悪魔的に卑猥で妖艶だ。

どうしようもなく屹立させてしまうと、りせはもぉ〜……とこちらをじとりとねめつける。

つまりかわいいぬいぐるみがカチカチのバイブに変わってしまったことについてこちらの非を責めているかのようだ。

どこらへんから自分が悪かったのかちょっとよくわからない。

まるで始まってしまったのは俺の責任と言わんばかりにりせはやらしい笑みを向けながらスキンシップの質を切り換える。

両手の指先と舌で三箇所同時に責め立て、ガチガチに張り詰めた肉棒を柔かい唇でわざとらしく咥えて引っ張り放して弄ぶ。

生唾を飲み込んで見守る俺を見て気を良くしたのかりせはとうとう亀頭に口をつけ大きく飲み込もうとする。

……だがそこで、なにかを思い出したように表情を曇らせ先程も見たような申し訳なさそうな目をこちらに向けた。

……さっきはゴメンねセンパイ……。私、嫌がっちゃって……どうなっちゃうのかわからなくて怖かったんだ……でも……

どうやらさっき拒否ったことを気にしているらしい。俺は特にその気はなかったので気にしてはいないのだというよりもまだ少女の身であれだけ悶絶させられたのだから、むしろごく普通の反応と言えるだろう。

ホントはね？いいんだよ？……
ムリヤリでも、私が泣いちゃうようなひどいことでも……
センパイだけは、してもいいの。
それでも私、たぶん許しちゃうし、感じちゃうから……
……どうされたいかなんて、自分じゃわかんないけど……
きっと……めちゃくちゃにされたいんだと思う……

少しだけ俯いて顔を真っ赤にしながらそう呟いたりせは
不意に開き直ったように顔を上げ、俺に対して真っ直ぐに
体勢を向け直すと、今度は湯船の中に両手をそろえて四つんばいに
なり、肩をすぼめて唇を縦に大きく開け、突き出した舌で
亀頭を迎え入れながらとても卑らしくペニスを呑み込んだ。
後ろの湯面に浮かんで見えるハート型のヒップを揺らして
りせは激しい水音を立てて、丹念に丹念に肉棒を舐りしごく。
そしてその姿を見せつけるように、猫のような目をいやらしく
細めて笑いながらこちらを見上げる。

文字通り小悪魔的な美貌を最大限に用いた挑発に堪らなく
俺は浴室でりせを抱き、そのまま絡み合いながら部屋へ戻
りせを布団の中に押し倒した。

部屋の中で二人っきり、今夜なに一つ邪魔が入ることのない布団の中で、ただひたすらにりせを抱いた。
イカせることも調教することもひとまず忘れて、夢中でお互いの全身を愛撫し合い、汗も唾液も愛液も精液も肉体に染み込ませ合った。
幾度も体位を変えてりせの全てに指や舌を這わせて、お預けになっていた精液ミルクも存分に飲ませてやり、お返しに恥ずかしがるりせの股間をべちょべちょになるまでしゃぶって愛液をすすり唾液を流し込んだ。

教室での時とは違い、絶頂に達するほどの性感にはいたらずりせの意識も幾分はっきりしたままだが、その状態で長時間お互いの体を貪り合って理性は完全にぶっ飛んでいる。
もはやなにをするにも抵抗がない二匹の獣が絡み合っていた。

あまりに休みなく続けられる行為に、やがて精も根も果ててきたりせが徐々に動けなくなっていき、それを確認した俺は目の前で力尽きてなすがままの雌を今度こそ限界まで責め尽くすことにした。

自分を見下ろす男の目つきが変わったのを見て、りせも生唾で喉を鳴らしながら覚悟を決めたようだった。
仰向けで乳房も腹も見せて、股を思いっきり広げ、両手は頭の上にやり、完全に雄に屈服し蹂躙を受け入れる意志を見せる。

いいよ……センパイの好きにして……
今夜は一晩中……失神しても犯し続けて……

俺は迎え入れるために広げられた股の間にゆっくりと陣取り
潤滑液まみれのりせの肉穴にまったく躊躇なく挿入し
激しく奥深くまで腰を打ちつけ始めた。

それから先はりせの最も敏感な部分をひたすら嬲り続けた。
りせの肉体は何度ものけぞり、獣声でアクメを伝え
結合部分からは大量の液体が吹き出し、垂れ流されていく。
シーツは大きく身悶え続けるりせの脂汗と愛液でぐしょ
ぐしょに濡れよじれ、腰を貫かれ突き押されていくりせの
体を力任せに引き寄せては、また何度も子宮を突き上げた。

体重を思いっきりかけてのしかかり、上下の口を隙間なく
塞いでは乱暴に腕と脚でしがみつくように命令し、それを
引き剥がす勢いで腰を振って膣奥を開発し続けた。

やがて何度もイキ続けて、小さく唸るだけでほとんど動か
なくなったりせの子宮口めがけて思いっきり子種を流し
込み、染み渡った精液に悦ぶ膣内をかき混ぜる勢いで
仰向けに寝かせ後ろから尻肉を打ち鳴らして何度も犯した。

そうしてすべての精を出し尽くした頃には、りせはトビ
過ぎたあげく完全に意識を失ってしまっていた。

さすがに立たなくなってくると、あとはりせが眠っている間指でマンコやアナルを弄び、普段は見ないりせの体を満遍なく観察してみたりして、りせが目を覚ましたらそこから朝まで布団の中で体を重ねたままお互いをこってりと舐り合った。

朝になったら一度シャワーを浴び、朝食片手にすぐにまた布団の中に戻り、体を繋げたままいろんなことを話して過ごし真昼間からはペッティングしあいながらじっくり精液をこしらえては、上下の口のどちらかにおねだりさせ、あげく実況解説ナビさせながら注ぎ込み続けるプレイを夜まで続けた。

んもー……またわざと顔にかけたぁ……
すでに日も落ち、ただれきった休日も終わりを迎えようとしている。
衝動を抑えきれずに顔射してしまった精液をりせはぺろぺろと猫のような仕草で舐め取る。すでに射精される精液の量は普段に比べれば微々たるものだが、それでもりせは丁寧に拭き取っては舌の上でくちゅくちゅ転がし味わっている。
口の中で直接射精されたいとは常日頃から言ってるが、もう昨日から口内だけでもどれだけの射精を繰り返したかわからない。やはりこの綺麗な顔を見てるとたまにはぶっかけたくなるのが男心というもの……。

りせは最後の精子を十分に味わい飲み込むと、満足しきった満面の笑顔を見せた。

……センパイっ！
……ごちそーさまっ……ふふフッ……
さっ、帰る前にもう一回シャワー浴びなきゃっ！
ねっ、行こっセンパイ！

……あれだけヒィヒィ言わせたのにタ、タフだなぁ～……
ってそういえば超多忙なトップアイドルだったんだからそりゃそーか。
むしろごちそーさまなんてこちらが言うべきセリフなんだけど……
などとひとりごちながら立ち上がろうとすると、部屋の隅に重ねてあった古いマンガ雑誌が目に入る。

そこには巻頭にりせちーの水着グラビアが載っていた。

うーん……このグラビアの中に写ってるりせちーが……
今は俺の目の前で顔射されたうえにその精液をおいし
そうに飲み込んで、それどころかいっしょにシャワーを
浴びようと言っている……。
しかも今の今まで俺の部屋で散々セックスしまくって
布団もシーツもりせの体液や体臭が染み込みまくって
部屋の中は二人の性臭で充満……

セ・ン・パ・イ・！
……もぉー、なんで本物の私が目の前にいるのに
そんな「りせちー」のグラビアなんて見るかなぁ……
いいから早くシャワー浴びよっ！ほらっ！

すごい目力でりせがこちらを睨んでいた……。
あ、そうか。これ表紙もりせちーだった……。

パラ…

りせは俺から取り上げた雑誌を放り捨てて、ぐいぐいと俺の手を引いて二人とも体液でベトベトの全裸で浴室へ向かう。

その途中の廊下でりせは不意に抱きついてきて、濃厚なディープキスを交わしたあと

じゃあ今度は「りせちー」をめちゃくちゃにしてみる？

と耳元で囁き、やらしく微笑みながら浴室へ歩いていった。

パラ…

あとがき

毎度どーも、桃幻食研です。
このたびはお買い上げありがとうございました。

今回は……りせちー！です。でした。
なぜなら……りせちー描いてたら、たまらなくなったから、です。
アニメの千枝ちゃん最高かわいいし、Ｐ４Ｕの使用キャラは雪子最高ですが
本編のゲーム終わったら、なぜかりせちと特別な関係になっておりました。

た、単純に、キャラデザが好き！絵柄が好き！立ちポーズが好き！
声が好き！アイドルって設定が好き！……みたいな感じで……
そういうのって、三次のアイドルを見るときと似てるから
まぁ……いいんじゃないかな？って……。

それにしても久々にエロい文章打つのが大変でした……。
合ってんだか間違ってんだかわからんよ。読み辛かったらスイマセン……。
とりあえず、単語の語感だけは気をつけましたともさ。

内容は、まぁ、まるで成長していない……っつーか、
こういうのが好きなんだよねってのを詰め込みました。
おチンチン、大好きな、女の子、好きです。大好きです。
あとクラスのマドンナとか、学園のアイドルとかと、秘密の ×× 、みたいな。
Ｓなプレイに Ｍな女の子とか、ダメな愛情とか、ダメなカップルとか
超絶偏なパワープレイに躾られっぱなしの女の子とか
ドギースタイルとか、なんとなく猫みたいになっちゃってる女の子とか

まぁ他にも好きなものはいろいろあるんですが……今回はそんなとこです。

……髪……髪、ほどきたかったよなぁ。
ステージ衣装とか着せたり。

それではまたお会いしましょう。ほなー。

サークル「桃幻食研」代表　入

ごめんりせちー…
ストリップの誘惑には
勝てなかったよ…（見物）

桃幻食研の
○もち
超JK級
三段重